巻 頭 言

大学図書館と私

この冬、大学図書館について様々に思いをめぐらせた。長年にわたって、まるで所与のものであるかのような図書館を私自身はどのようにとらえ、利用してきたのであろうか。

研究を進めるにあたって、参考とすべき文献を探しに書庫へ入ることは基本中の基本と考えてきた。近年では電子ジャーナルの充実にもなって研究室から多くの文献を検索でき、コピーも簡単に手に入るようになった。反面、膨大な図書資料やジャーナル論文を前にして、十分には渉猟してこなかった自分を情けなく思ってきた。自らの不勉強を棚に上げ、「俺はフィールド屋だ」という身勝手な理由をつけてきたのも事実である。卒論作成中の学生を書物を前にして指導したり、グループ閲覧室でゼミの研究会を催したりしたこともあったが、それらも一過性のものにすぎなかった。図書館と自身との関係性を考えると、決して自慢できるようなものではなく、はなはだ心もとない。

最近になってようやく教育・研究と図書館を結ぶことができるようになってきたと感じる。それは本館が所蔵する『兵庫県漁具図解』との出会いからである。1897（明治30）年刊行のこの貴重な資料はデジタルライブラリのひとつとして公開されている。ここ3年、資料研究系・実習系科目で図書館に足を運び、実物を学生に示している。折れ本のめくり方、メモを取る際には鉛筆以外の使用禁止など文書を扱う基礎を学び、百数十年前の「海の世界」へと誘う授業は、学生に好評であると自負できるようにもなった。何よりも、多くの初学者がフレッシュな目で発見したコメントは、私自身の図解研究の幅を広げる。さらに県内の漁業者・漁業関係者との交流のなかで、彼らを本学図書館に迎え、図解をご覧いただく機会も重ねてきた。祖父から習った技術と同じだ、今の漁法と何ら変わらないなど、現場からの貴重な意見は、新たな研究方法を視野に入れるべきことを教えてくれる。

さて、今春から大学図書館長の任に就くことになった。膨らむ図書費への対応、電子化の推進、西宮上ヶ原・神戸三田・西宮聖和キャンパス各図書館での情報の共有、アクティブ・ラーニングやハンズオン・ラーニングとのコラボレーションなど、図書館がかかえるいくつもの課題を前にして身の引き締まる思いである。

教職員の皆様、学生諸君をはじめ多くの方々からご意見をいただき、館員とともに考え、大学における学術の中心である図書館をより良きものにしていきたいと強く願っている。皆様のご支援をよろしくお願いしたい。

大学図書館長 田和 正孝